

《論 文》

シュンペーターの「企業者」ビジョンとニーチェ思想

—『経済発展の理論』（第2章）の世界から—

樋口辰雄

1. シュンペーター再考
2. ツァラトウストラ・ヴェーバー・創造的破壊
3. 『経済発展の理論』（第2章）とニーチェ

おわりに

1. シュンペーター再考

ヨーゼフ・アロイス・シュンペーター (Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950) は、イギリスの経済学者・ケインズ (J. M. Keynes, 1883-1946) としばしば比較されて、栄光者扱いされること少ない、多彩な経済理論家といえよう。19世紀末から20世紀初頭にかけて、オーストリア=ハンガリー帝国という多民族国家の下で、オーストリア学派の中心地ウィーン大学で、法制史、国家学、ショーペンハウアーの哲学を始めとして、「経済学」や経済史を学んだシュンペーターは、同時に、早熟な才能を発揮して、次々と論文を発表するなどして、マルクス (K. H. Marx, 1818-1883) と並び称されるドイツを代表する最大の社会学者のひとり、ヴェーバー (Max Weber, 1864-1920) とともに学問的交流があった。どちらかと言えば貴族主義的気質を有した人間である。限界効用学説を唱えたC. メンガーから始まるこの頃のウィーン大学では、シュンペーター以外に、ボェーム・バヴェルク、ヴィーザーといった経済学者や、フォン・ミーゼス、ヒルファーディング、E. レーデラー、パウアー、アドラー、K. レンナー

など、後代に社会主義者として、あるいは自由主義者として様々な世界観を擁した人達が活躍し、王朝文化の最後の円熟期を享受していた。しかし、シュンペーターが高く買っていたマルクスを除けば、社会学的方法的個人主義に立脚して、社会学的世界に精密なカズイステークで攻勢をかけたヴェーバーや、有効需要、「ケインズ革命」で知られるケインズを前にしては、シュンペーターに配される学問的名誉や地位は、それ程高くはなかったといわざるをえない。その一例として、とりわけ「社会主義」の問題を取り上げた時、未だ誕生したばかりのロシアでの「実験」ではあれ、これに対するヴェーバーによる厳しい将来予測に反して、『資本主義・社会主義・民主主義』などで叙述されたシュンペーターの見解について、1990年前後における歴史的大変動を目撃したわれわれには、どちらに「歴史の審判」を下すべきか、改めて問うまでもない（「1世紀といえども「短期」である」というシュンペーターの言に信を寄せて、これを支持することも自由だが）。同じことは、「終末論的歴史観」を継承しているマルクス自身の思想に対しても妥当しよう。しかし、様々な欠陥や問題点があるにしても、社会学や経済社会

学の立場から見たとき、シュンペーターが後世に残した学問的遺産は巨大なものがあり、そうした全体像は、最近になって漸く解明されるに至った（特に、塩野谷裕一による研究）。そこで、以下の考察では、純粹経済理論からシュンペーターの解釈や概説を敢行するのではなく、先人たちが「総合化」を試みた体系像と筆者がこれまで従事してきた狭い研究と照らし合わせ、それに基づく問題提起により、滔々たる経済思想史の「流れ」に竿さしたこの経済社会学者の隠された側面を再考してもらうこと、この点に焦点が置かれる。その側面とは、政治思想史では近年次第に着目されつつも、経済学の領域、経済思想史の領域では、これまで全く考慮されて来なかった、経済学と哲学（「シュンペーターとニーチェ」）の関連いかん、というフロンティアに属する側面である。

2. ツアラトストラ・ヴェーバー・創造的破壊

戦後わが国における社会諸科学の分野では、前で少しく触れたように、様々な事情からして、マルクスやヴェーバーに関説した研究は、かなり盛況を呈したのに対し、ニーチェ思想に配慮した社会科学の研究は、驚くほど僅少であった。ニーチェは哲学の分野で扱うべきだとするタコツボ意識がこれに拍車をかけていたり、或いは、戦後日本社会を規定していた経済・政治・社会・宗教などの「各領域」における諸傾向・諸利害（内的・外的）の為に阻止されていたりして、ニーチェをも包摂した、バランスある社会科学に向けての学問的構築が遅れてきたと言わねばならない。前代から継承するに際し、学問なるものがいかに「批判的」でなければならぬかが、改めて反省させられる。しかし、徐々にではあるが、事態は改善を示しつつある。それは、ニーチェを哲学という人文科学の領域にひたすら封じ込めるだけでなく、社会学や政治学（政治思

想）や経済学（経済理論）といった社会諸科学を含めた分野でも積極的に取り入れて、オープンな精神が高まりつつあるからである。ある良き意味における「分業による協業」関係が見られるのである。ここでは、前節との関連から、ヴェーバーとニーチェの主著の一つである『ツアラトストラ（はかく語りき）』との隠された因縁について簡単に触れた後で、「経済理論とニーチェ」という問題領域に立ち入ることにする。

『力への意志』と『ツアラトストラ』の二つの著書は、「同じものの永遠回帰」なるニーチェの晩年における難解な思想が語られた著作である。前者は、ヴェーバーの学問的内奥にまで食い込んだ重要な著作であり、また、後者は、同じヴェーバーの著書『倫理』論文の結語の一節中に、「禁欲の精神」が産み落とした「鋼鉄の檻」と化した現代資本主義の「巨大な発展」が行き着く先として、ヴェーバーが第三番目の不気味な予兆として提示している断片（＝「幸福」を考案〔捏造〕した、とってまばたきする末人たち⁽¹⁾）として有名である。そして、ヴェーバーの最晩年における講演、『職業としての学問』では、ニーチェの「神は死んだ」という認識を引き継ぐかのように、こうした「末人」批判、「幸福への道」としての学問批判を展開したニーチェの「破壊的批判」（vernichtende Kritik）⁽²⁾を受け入れた上で、「神々が闘争」する時代、「神とは疎遠で預言者なき時代」における学問の運命や、脱呪術化を完了し、巨大な一つのコスモスと化した現代資本主義下におけるその「意味」について、考察が重ねられたのであった。また『職業としての政治』では、特に政治家に求められる資質や権力〔力〕世界を相手にする際に、避けがたい政治家の職業病や心理的特性を論ずるに当たって、ヴェーバーは、ニーチェの『力への意志』を始めとして、

様々な著作に盛られたアフォリズムを下地にして、後世に残るような記念碑的政治論を展開したのである。ヴェーバーは、「世界諸宗教の経済倫理・序論」において、ニーチェが示した「ルサンティマン」説に厳しい批判を寄せたにも係わらず、この『政治』では、デマゴグに対する名望家の「反感」として、この「ルサンティマン」概念を踏襲しているのである⁽³⁾。ここでは、そうした細かで錯綜した分析に立ち入れられないが、それでも、「人柄」「人格」（ペルゾーン）が死活の要素となる「指導者」（カリスマの指導者）の目的・使命を説明する際に、ヴェーバーは、敢えて『ツァラトストラ』の最終章（「しるし（Der Zeichen）」）の一節から、分からぬように引用しているのである（「同情だ！ 高等な人間に対する同情だ！」と彼〔ツァラトストラ〕は絶叫し、彼の顔容は青銅に変わった。「よし！ かくてあるも——今や果てた！ 私の苦悩とわたしの同情——それになんのがあろう！ いったい、わたしの志しているのは、幸福を得ることだろうか？

わたしの志しているのは、わたしの事業（ヴェルケ）を成就することだ！」⁽⁴⁾）。ハイデッガーは、ニーチェの永遠回帰の思想に対し、否定（ボイムラー、ヤスパース）と受容という、これまで研究者が示してきた二つの「反応」を紹介している⁽⁵⁾。また、ハイデッガーに師事し、ハイデッガーの主著『存在と時間』や「ハイデッガーのニーチェ講義」に批判的であったK.レーヴィットは、ヘーゲル、マルクス、キルケゴール、ニーチェ、ハイデッガーなどと、多彩な西洋の哲学的伝統を再考した歴史哲学者として知られているが、とりわけ『ヘーゲルからニーチェへ』を介して、レーヴィットの思想の重点は「実践」「実存」「歴史意識」に置かれていると誤解されてしまった。レーヴィットの本意はむしろ「ギリシャ的自然への回帰」にあったと

も指摘され、その限りでニーチェへと関心が向けられたのだと、一部では言われている⁽⁶⁾。

ところで、ニーチェの難解な主著とされた『力への意志』や『ツァラトストラ』に対して、どのような受容ないし反発がヴェーバーからなされたのか、一応その問題を保留したままで、次に、シュンペーターとヴェーバーに纏わる逸話に触れながら、シュンペーター経済理論に組み込まれたある「側面」に関する論題に入ることとしよう。

1918年の中ごろ、アメリカの参戦で、第一次世界大戦の帰趨が明確となり、またロシア革命が進行している頃、シュンペーターは、ヴェーバーとウィーンのカフェで落ち合い、そこでロシア革命について両者は激しく応戦したという（同じ年に、もう一度両者はヴェーバーの方法論を巡って戦っている⁽⁷⁾）。「シュンペーターはロシア革命について満足の意を表明した。社会主義はもはや机上の空論ではなく生存能力のあることを証明した」と。「マックス・ヴェーバーは激昂して、ロシアの発展段階での共産主義はまさに犯罪であり、その道はかつてない人間の悲惨をつきぬけて、恐るべき破滅に終わるだろうと」言った。“そうかも知れない。だが我々には本当によい実験室になりますよ”とシュンペーターは応戦した、とヤスパースは記している⁽⁸⁾。この年、ヴェーバーはウィーン大学で「唯物史観の積極的批判」と題した講義を行ない〔更には、オーストリア将校を前に、非常に重要な講演である「社会主義」も実施した〕、その一方のシュンペーターは、母国の敗戦と打ち続く混乱の中で、K.レンナー社会民主党連立内閣に入閣して大蔵大臣に着任した（1919年2月——しかし10月には、鉱山会社の株取得を巡る問題で辞任する）。その後、心の傷を負ったシュンペーターは、銀行経営への参与（と破産）、ボン大学教授（1925-1932）を

経て、1932年には、ハーバード大学に招聘され、アメリカに移住してしまうのである。ハーバード時代は、シュンペーターにとって、多くの弟子に恵まれた幸福な一時期であった。と同時に、「ケインズ革命」という思わざる旋風がアカデミズムの世界を襲い、若い研究者たちが次々とこの理論「革命」に加わって次第にシュンペーターの元から離れていき、言いようのない「憂愁と孤独」な内的世界に追いやられた時代でもあった⁽⁹⁾。ところで、社会学的視点から見たとき、シュンペーターの数ある著作の中で、最も魅力的で、今もって価値ある著作は、次の二つではないかと思われる。それは、『資本主義・社会主義・民主主義』(1943年)⁽¹⁰⁾と『経済発展の理論』(1912年)⁽¹¹⁾である。勿論このほかにも、理論経済学ないし経済学史の分野で、『理論経済学の本質と主要内容』(1908年)、『経済学史 学説ならびに方法の諸段階』(1914年)、『諸帝国主義の社会学』(1919年)、『景気循環論』(1939年)、『経済分析の歴史』(1954年)などがあるが、経済学と社会学の接点と言うか、そうした重複分野に関して優れた概念枠組みを提供しているものは何かと問われれば、上記の二つであろう。特に、『資本主義・社会主義・民主主義』の著作は、ソヴィエト社会主義の崩壊と、「社会主義市場経済」という矛盾したヤヌスを抱き合わせて問題ある「実験」が行なわれている今日、また、再構築(リストラクチャリング)という成熟化した現代資本主義が直面している構造調整問題や「精神・文化問題」を考える際に、ヴェーバーがわれわれに残した「合理化」に関する歴史社会学に劣らず、批判的かつ積極的に取り組むべき価値ある著作の一つである。

『資本主義・社会主義・民主主義』は、上記のように、アメリカ滞在中の1942年に公刊された。これを書き上げるのに、シュンペーターは

1、2年で仕上げたと言われているが、それはむしろ「シュンペーターの40年にわたる資本主義の動態に関する思索と観察と研究の総決算」であり、またそれはシュンペーターの「総合的社会科学」、「進化的科学としての経済社会学」がここに具体的に集約された著作である、と位置づけられている。塩野谷裕一は、その著書『シュンペーター的思考』(第9章)において、このしばし「誤解」を呼んできた『資本主義・社会主義・民主主義』を正しく評価するためには、シュンペーターの「方法的観点」が理解されねばならないとして、シュンペーターの「社会主義」は開発志向型社会主義(旧ソ連、東欧、中国)とは無縁であること、資本主義が社会主義に取って替えられるというシュンペーターの予言が誤りだとする「解釈」は、シュンペーター解釈として正しくなく、むしろその崩壊こそ彼の議論の正しさを証明していること、資本主義システムは安定的でもその秩序は不安定だとする独特なレトリックから、「資本主義の成功による資本主義の崩壊」という逆説的結論が導き出されていること、その外、経済学と経済社会学との結合や道具主義的理論構成などが、注釈されている⁽¹²⁾。『資本主義・社会主義・民主主義』の「第二部 資本主義は生き延びうるか」の冒頭にある一文では、科学(事実と論証)と予言との峻別の必要性を強調した後、シュンペーターのエッセンスとなるものが述べられる。すなわち、「資本主義体制の現実的かつ展望的な成果は、資本主義が経済上の失敗の圧力に耐えかねて崩壊するとの考え方を否定するほどのものであり、むしろ資本主義の非常な成功こそがそれを擁護している社会制度をくつがえし、かつ、「不可避免的に」その存続を不可能ならしめ、その後継者として社会主義を強く志向するような事態をつくり出す⁽¹³⁾」と。この同じ第二部・第七章(「創造的破壊の過程」)において、

シュンペーターは、『経済発展の理論』で導いた中心的結論を援用しながら、シュンペーターを一躍有名たらしめた例の概念（「創造的破壊」）を用いて、資本主義の「本性」とも言うべき性格を説明している。「およそ資本主義は、本来経済変動の形態ないし方法であって、けっして静態的ではないのみならず、けっして静態的たりえないものである。…資本主義のエンジンを起動せしめ、その運動を継続せしめる基本的衝動は、資本主義企業の創造にかかる新消費材、新生産方法ないし新輸送方法、新市場、新産業組織形態からもたらされる。…この「創造的破壊」（Creative Destruction）の過程こそ資本主義についての本質的事実である。それはまさに資本主義を形づくるものであり、すべての資本主義的企業がこのなかに生きねばならぬものである。」⁽⁴⁾（ここでの論脈は、以前に書かれた『経済発展の理論』の第2章の内容と密接に関連しているので、後に、この第2章を分析する際に触れることになろう）。しかし、こうしたシュンペーターの「資本主義」像は、投資機会の消滅、「資本主義の文明」、「くずれ落ちる城壁」、「増大する敵対」、「解体」などにより修正・変更を余儀なくされていくのであるが、ここではこの論理展開にこれ以上立ち入れない。むしろ、僅かに顔を覗かせたこの「創造的破壊」という有名な概念について、吟味してみたいのである。

塩野谷は、前述の著作におけるシュンペーターの「企業者概念の想源」と題した叙述において、シュンペーターの「企業者」概念と深く関連する人間類型論、指導者類型の思想形成に影響を与えた人々として、ニーチェ、ベルグソン、パレート、タルド、ヴェーバー、オルテガなどを指摘し⁽⁵⁾、これらに関する海外での研究動向を紹介している⁽⁶⁾。そして、シュンペーターの独自性を侵害しないかぎり、「これらの議論

〔シュンペーターに与えた思想的影響〕はシュンペーターの思想の源泉を特定のものに限定しない限り、もっともなもの」として、承認しておられる。これらの諸論文を素読した限りでは、こうした説明だけでは未だ十全な説明とは言えず、更に一步立ち入ってニーチェからの見えざる「影響」やそれとの「交錯」といった側面を掘り下げる必要があるように思われる。なぜなら、『資本主義・社会主義・民主主義』におけるニーチェ的要素がもし孤立的現象であれば、それは複数掲げられた「シュンペーター思想の源泉」のほんの一要素に終わって、別段それ程重要とは判断されにくい。このニーチェ的要素が『資本主義・社会主義・民主主義』に留まらずして、円熟期の代表作である『経済発展の理論』へと遡ることができるのであれば、それは、単なる偶然事として処理し難く、新たな思想的地平へとわれわれを導くことになるからである。

そこでまず、やや語義的繋がりから入って行くと、この「創造的破壊」なる着想は、次のニーチェ『ツァラトゥストラ』の一節——それは、シュンペーターと或る折に激しく論争したヴェーバー、の『倫理』論文や二つの『職業』論文（『職業としての学問』・『職業としての政治』）の問題意識とも重なっている——を意識しているように思われる。ニーチェの「超人」思想が語られる、「ツァラトゥストラの序説」と題された章中の一節である。

「善にして義なる者たちを見よ！ 誰を彼らは最も憎んでいるか？ 諸価値の記されている彼らの諸板を破碎する者を、破壊者、法の破壊者を、である。——だが、この者こそ創造者なのだ。創造者が求めるのは道連れであって、死体ではなく、また畜群や信者たちでもない。創造者が求めるのは共に創造する者たち、新しい諸価値を新しい諸板の上に書く者

たちである。創造者が求めるのは道連れであり、そして共に収穫する者たちである。というのは、彼のもとでは一切のものが成熟して収穫を待っているからだ。しかし、彼には百の鎌が欠けている。そこで彼は穂をむしり取り、そして腹を立てているのだ。創造者が求めるのは道連れであり、そして自分たちの鎌をとぐすべを心得ている者たちである。彼らは善悪の破壊者にして軽蔑者と呼ばれるであろう。しかし、この者たちこそ収穫する者であり、祝祭を行なう者である。…」⁽¹⁷⁾

神は死んだ、超人と最後の人間〔末人〕、「自由精神」、「われわれは幸福を考案〔捏造〕した」など、ヴェーバーの歴史感覚とも大いに関連するこの「序説」は、シュンペーターにとっても、資本主義の本質と、その資本主義を支える「企業」(Unternehmung)、そしてその企業の経済主体として行動する「企業者」(Unternehmer—昨今では「起」業家とも訳される)をそれぞれ経済社会学的に説明する際に、重要な補助手段を与えたように思われる。シュンペーターは、ヴェーバーの「合理化」概念の継承と共に、「資本主義の文明」の中で、ニーチェを予期させる「意志」や「反英雄的」「非英雄的」「騎士」「貴族」などの言葉を用いながら、こうした澁刺たる要素が次第に衰退して「企業者機能」が失われていく様相を叙述しているのである⁽¹⁸⁾。これまでの研究は、「シュンペーターとマルクス」や「シュンペーターとヴェーバー」や「シュンペーターとケインズ」などの観点から、それなりの業績が積み重ねられてきたが、そこからこぼれ落ち、しかも前世紀(20世紀)から持ち込まれた問題地平として、経済思想史の分野でも注目されなかった、シュンペーターとニーチェとの係わり、この問題が取り残されているように思われる(但し、「エリート主義の経済学」との副題を付けたあるシュンペーター論の中で、

森嶋通夫は、「シュンペーターの資本主義社会は、ただ者ならぬ企業者と銀行家が経済を引っ張っていくニーチェ的な英雄主義の世界である」⁽¹⁹⁾と述べ、そうした問題系譜は追跡されてはいないものの、鋭い指摘をしている数少ないものの一つである)。こうした『資本主義・社会主義・民主主義』に盛り込まれた微かな手掛かりを元に、次に、『資本主義・社会主義・民主主義』より以前に書かれた、シュンペーターの代表作『経済発展の理論』へとここで立ち帰って、この問題を追跡することにしよう。もし『経済発展の理論』を理解する上で、本稿で投げかけている問題提起に意味があり、科学的論証に耐えるものであれば、それは単にシュンペーター研究に留まらず、これを越えて、広義における社会諸科学と人文諸科学との協力や提携、相互啓発を図る上で、貴重な刺激となるはずである。また、それは晩年の中山伊知郎がいう「発展の人間学」を、それこそアンソロポロジーの面から基礎づける1礎石となるものである。

3. 『経済発展の理論』(第2章)とニーチェ

シュンペーターは、1908年、「道具主義方法論」を特徴とすると称される『理論経済学の本質と主要内容』(25歳)⁽²⁰⁾を公刊した後、1912年になって、ここで検討対象とする例の『経済発展の理論』⁽²¹⁾(初版・30歳前後)を世に送り出した。そして、第一次世界大戦を挟んだ1926年に、新たに「企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究」との副題を付した同じ書名の改訂版(第2版)を出している。1912年から1926年の間に、シュンペーターは、『経済学史——学説ならびに方法の諸段階』(これは1914年、ヴェーバーが中心となって編纂した『社会経済学大綱〔要綱〕』に掲載された)、『社会科学の将来像〔過去と未来〕』、『貨幣・分配の理論』、『租税国家の危機』、『諸帝国

主義の社会学』、『今日における社会主義の可能性』などの著作や論文を多数書いている。この『経済発展の理論』は、シュンペーター研究者によれば、「経済学の静態理論と経済社会学」の「中間点」・「中継点」の位置を占め、「経済発展」という現象を新たな対象に据えたこれによって、シュンペーターは、「理論」を越えて「歴史」の領域に入るきっかけをつくった、といわれている。その一つが社会階級論であり、もう一つが『景気循環論』へ、そして前に少しく触れた『資本主義・社会主義・民主主義』に行き着く流れであるといわれている⁽²²⁾。

さて、シュンペーターの広大な学問体系の中で、重要な中間点を構成するこの『経済発展の理論』は、ヴェーバーの『倫理』論文の運命に類似するかのごとく、1912年に発表された第1版を改訂するという経緯をえている。その第2版（1926年）を出した以降、その内容は同じものらしい（但し、第6章は、章題と内容が改められた）。そこで、本稿の問題と関連する事柄に絞って、原著第1版と第2版に添えられた「序文」をそれぞれ比較しながら、なぜそうした改訂を余儀なくされたのか、この辺りから始めることとしよう。初版の「序文」で目につく点は、同書が『理論経済学の本質と主要内容』の姉妹編であること、この著作が理論的性質を有していること、同書が「無味乾燥な」第1章から始まって「第7章」まで続く叙述であること、そして『本質』と同書との関連をめぐって誤解や批判を予想していたことなどである。これに対し、第2版の「序文」は、両版を跨ぐ10数年の期間にこの初版に浴びせられた「批判」・「否定」・「異議」に対する自己弁護と、これらの批判に答えるために行なった各章の「改訂」理由やら説明とやらで、痛々しく彩られている（「私はこの書物の内容を問題にしようとする専門家に対しては、今後この新版のみを利用され

ることを希望する」⁽²³⁾とまでいわしめている）。そうした批判的論争には、メンガーの弟子であり、自らの恩師でもあるボエーム・バヴェルクも参列したようである（資本利子を巡る論争）。「かくして、この版〔第2版〕はなによりも短縮されることになった。初版の第7章〔国民経済の全体像〕はまったく省略されている。この1章がおおよそ影響力をもったとすれば、それは私にとってはまったく望ましくない仕方でおこなわれた。ことにその中に示された文化社会学の断片は、読者の注意をともすれば無味乾燥な経済理論の問題からそらせるものであった。しかもこれらの問題の解決が理解されることを私は望んでいるのである」⁽²⁴⁾と自身述べているように、著しく初版を「短縮」することを余儀なくされた。第2版の出版に当たって、シュンペーターがなしたことは、第7章の削除と共に、第2章の大幅な「改筆」であった。この辺りの事情について、本人の言葉に耳を傾けてみよう。「第2章はそれ以下のすべての部分が生れてくる基本構造を与えるものであるが、それはほとんど全文にわたってまったく新しく書き直された。この修正に当たっては、以前に青年らしい冗長と自負をもって書かれ、したがってそれ相応の抵抗を招きがちであった多くの部分を削除した。しかし、いますべてがより正確に、より精密に書かれているとしても、また反省や経験によって現在眼前にある事象を見る視角が変更されたとしても、本質的な点は依然と同じである。」⁽²⁵⁾更に「序文」の後方で、この「第2章の各命題はすべて重要である」とまで強調しているのである。しかも、シュンペーターは、『職業としての学問』で、比喩的に、ある写本へのラウシュ（情熱）なき人間は学者に向いていないとヴェーバーが語る光景を想起させるが如く、「それ〔本書〕は対象の性質上、単なる単純化によっては取り除くことのできない思考

の複雑性をもっているために、その議論に対する読者の冷静な勉強なしにはまったく近づきにくいものである。理論的訓練に欠けているためにこの勉強をすることのできない人、あるいはその努力を価値なしと考えるためにこの勉強をしようと欲しない人は、本書を読んでも時間の損失⁽²⁶⁾でしかないと警告を出すことを忘れなかった。

参考までに『経済発展の理論』（第2版）の各章題を掲げると、以下の通りとなる。「日本語版への序文」、「原著第1版序文」、「原著第2版序文」、「第1章 一定条件に制約された経済の循環」、「第2章 経済発展の根本現象」、「第3章 信用と資本」、「第4章 企業者利潤あるいは余剰価値」、「第5章 資本利子」、「第6章 景気の回転」、以上である。

前述したように、シュンペーターは、初版の末尾に第7章としてあった「国民経済の全体像」を削除し、これに加えて、初版第2章の「経済発展の根本現象」(Das Grundphänomen der wirtschaftlichen Entwicklung)を「全文」にわたって新たに書き直したのであった⁽²⁷⁾。他の章の叙述は、「若干の短縮、補足、変更」がなされた模様であるが、その言葉を信じれば、第3章以外はほぼ初版のままにおかれた。この著作において、シュンペーターは、『理論経済学の本質と主要内容』（「本書でわれわれが取り扱おうとするのは静学のみである」⁽²⁸⁾）で若干示唆していた「動学」問題——「経済発展」という社会現象に関する理論的考察——について、本格的に取り組もうとしたのである。やや専門的な経済的説明になるが、シュンペーターによれば、経済発展という問題は「年々歳々本質的に同一軌道にある「循環」の観点から考察される」経済生活の問題ではなしに、経済循環やその軌道そのものが「変化・変動」することから生じる経済現象であり、「なぜかかる変動が実

現するのか」、これを理論的に解こうとする独自の問題とされる。特に「発展」現象は、経済外的要因（ミリューの変動）による変化ではなく、経済自身がその「内部」から自発的に生み出す循環の変化であるゆえに、「静態的考察方法」では捉えがたい。求められるのは、循環軌道の変動の理論、「動態」理論であるとの観点から、『理論経済学の本質と主要内容』（第4章）で暗示されていた「発展という大問題」⁽²⁹⁾に携わることとなる。そうしたシュンペーター理論の中心的思想がこの全面的に書き直された第2章に盛り込まれて、「経済発展」の意味、均衡の推移を扱う動態理論、「新結合の遂行」、この新結合を遂行する上での「信用」の重要性、銀行による貨幣創造や銀行家の機能、企業者機能、経済生活の「慣行軌道」を打ち破る「指導者類型」といった、今日では理論的にも、現実社会的にも、広く知られるようになったシュンペーター経済思想の重要なエッセンスの幾つかが、ここ第2章において展開されたのである。そうした思考の航跡を跡づける作業は、既存の概説テキストに委ねるしかないが、正しくシュンペーターが言うように、この第2章は、それ以後の叙述を支える「基本構造」であり、そこに提示された各命題はすべて重要なものとせねばならない。だが、われわれの使命はこれとは別の諸点にある。ニーチェとの係わりである。そこで、残り少ない紙幅をこの問題解明に集中して充たせねばならぬ。

まず、第2章の叙述の中で、ニーチェ〔ないしヴェーバー〕の思惟像との関連について、改めて再考されるべき文節を紹介し、次いでその理由を説明するという方法を取ろう。

I. 「慣行の循環においては、各経済主体は自分の地盤を確信しており、自分の関係せざるをえない他のすべての経済主体の循環に適合した態度によって支えられており、またこれ

らの経済主体も再び彼に対して慣行の態度を期待しているために、迅速かつ合理的に活動することができるのに反し、彼が非慣行の課題に直面したときには、このようにむぞうさにおこなうことはできない。慣行の軌道では通常の経済主体には彼自身の知識と経験だけで十分であるが、新しい事態に対しては指導が必要となってくる。彼はすみずみまで十分に分っている循環の中では潮流にしたがって泳ぐが、彼がその軌道を変更しようとするときには、潮流に逆って泳ぐことになる。以前は支柱であったものが、いまや障害となる。熟知していた与件がいまや未知のものとなる。…」（「新結合の遂行」はなぜ特殊な種類の機能であるか」中の一節）⁽³⁰⁾。

II. 「指導者活動 [Führerschaft] の定義やヴェーバー的合理化の進展などによる「企業者」類型の重要性の低下に触れた後で、以上の点は経済主体の課題に関するものであるが、第2の点は経済主体の態度に関するものである。新しいことをおこなうのは、慣行的なものや試験ずみのことをおこなうよりも単に実際に困難であり、趣を異にしているだけでなく、さらに経済主体は新しいことに反対し、たとえば実際上の困難が存在しない場合にもなお、これに反対するのである。これはあらゆる領域においてもそうである。学問の歴史は、たとえばわれわれが新しい学問的接近方法を採用することがいかに困難であるかという事実の最も大きな確証となる。慣行の軌道が不適切なものになったり、もっと適切な新しいものがそれ自体まったく特別な困難を示さない場合においてすら、人々の考えは再び慣行の軌道に立ち返ってくるのである。固定的な思考習慣の本質や、それが労力を省くことによって生活を促進する作用は、その習慣が潜在意識になっていて、結論を自動的に導き、批判

に対しても、個々の事実の矛盾に対しても保障されているという事実に基づいている。思考習慣はこのような働きをするのであって、その最後の甲鐘が鳴ったあとでも依然としてそうであり、そのときには障害物と化するのである。経済活動の世界においても同様である。新しいことをおこなおうとする人の胸中においてすら、慣行軌道の諸要素が浮かび上がり、成立しつつある計画に反対する証拠を並べ立てるのである。意志を新しく働かし、その方向を変えることは次の事情によって必要となる。日常の仕事と配慮の中から、すでにその中に含まれているもののほかに、新結合の立案と完成のために必要な余地と時間を搾り出すためには、また新結合を単なる夢や遊戯ではなく、実際に可能なものとみなしうるようにするためには、意志の新しい違った使い方 (Willensaufwendung) が必要となってくる。このような精神的自由 (geistige Freiheit) は、日常的必要をこえる大きな力の余剰 (Überschuß von Kraft) を前提としており、それは独特なものであり、その性質上稀なものである。」（「指導者活動 [Führerschaft、指導者精神・指導者資質、と解すべきだ] と慣行の軌道」中の一節）⁽³¹⁾。

III. 「われわれが上述した3点は、指導者機能の性質を特徴づけるばかりでなく、1つの類型を構成する指導者態度の性質を特徴づけるものである。指導者はそれ自身、新しい可能性を「発見」したり「創造」したりしない。…指導者機能とはこれらのもの〔一諸可能性〕を生きたもの、実在的なものにし、これを遂行することである。…指導とは仕事そのものではなくて、これを通じて他人に影響を及ぼすことを意味する。指導者行為とは、騎兵隊の指揮者が真先きに敵陣に乗り込んで、敵を方式通りに屠り殺すことではなくて、むしろ

そのさいに部下を引き連れて行くことである。最後に、以上のことは完成された社会的地位という装置を通じておこなわれる指導者活動についてもあてはまる。そして指導者類型を特徴づけるものは、まず事物を見る特殊な方法であり——このさい再び注意すべき点は、これは知力を意味するのではなく（知力を意味するとしても、単にその広さや高さではなくて、まさに特定の種類の狭さ（Enge）を意味するのである）、むしろ確固たる事物をつかみ、その真相を見る意志（Willen）と力（Kraft）を意味するということである——、またひとりで衆に先んじて進み、不確定なことや抵抗のあることを反対理由と感じない能力であり、さらに、…他人への影響力である。」（同上）⁽³²⁾。

IV. 「彼〔企業者類型〕の「経済的動機」すなわち財貨獲得の努力は、獲得された財貨の消費が与える快感感〔Lustgefühl〕に根ざすものではない。…典型的な企業者というものは、自分の引き受ける努力が十分な「享楽剰余」（Genußüberschuß）を約束するかどうかを問うものではない。彼は自分の行動の快楽的成果を気にかけない。彼は他に為すべきことを知らないために、たえまなく創造をする（schafft）。彼は獲得したものを享楽して喜ぶために生活しているのではない。もしこのような願望が現われたとすれば、それは従来の活動線上の停滞ではなく彼の衰滅であり、自己の使命の履行ではなく肉体的死滅の徴候である。（「動機の問題とその意義」中の一節）⁽³³⁾。

V. 「企業者類型に関するわれわれの画像のものには「ますます多くを」（plus ultra）というモットーが成立する。…彼の行動を適切に解釈する動機は十分に手近なところにある。第一に、私的帝国を、また必ずしも必然的で

はないが、多くの場合に自己の王朝を建設しようとする夢想と意志（Wille）がそれである。活動の余地と権力意識（Machtgefühl、力の感情）とを確保する帝国のごときものは、本来現代世界には存在しえないが、現代世界において最も支配的地位に近いものであって、その地位の魅力は社会的権威に到達する他の道をもたない人々にとってはとりわけ強く感じられるのである。…次に、勝利者意志（Siegerwille）がある。一方において闘争意欲があり、他方において成功そのものための成功獲得意欲がある。経済生活はこのどちらの方向に対しても本来無関係な地盤である。利潤量はしばしば別の指標がないという理由だけで成功の指標となり、勝利の記念柱となる。かくして経済行為はスポーツ（Sport）のようなものになり、金融上の角逐、さらには拳闘さえ見られる。…最後に、創造の喜び（Freude am Gestalten）は上述した一群の動機の第3のものであって、これはたしかに他の場合にも現われるが、この場合のみ行動の原理を定めるのである。これは一方では行為そのものに対する喜びである。「単なる業主〔Wirt〕」が1日の労働を辛うじて終えるのに対し、われわれの類型はつねに余力をもって（Kraftüberschuß）他の経済的戦場を選び、変化と冒険とまさに困難そのもののために、経済〔国民経済〕に変化を与え、経済の中に猪突猛進する。他方では、それは仕事（Werk）に対する喜び、新しい創造そのものに対する喜びである。それがそれ自体独立した喜びであるか、行為に対する喜びと不可分のものであるかは問題ではない。この場合にも、財貨獲得の「意味」を構成する根拠から、またこの根拠の法則にしたがって財貨が獲得されるのではない。」（「さまざまな刺激」中の1節）⁽³⁴⁾。

まずⅠ. の節に出てくる、「慣行の軌道」を打ち破る「企業者」の主体的条件に関するシュンペーターの視点である。その理論によれば、「企業者」は「新結合の遂行」＝「革新」（新しい財、新しい生産方法、新しい販路、新しい供給源、新しい組織の導入）を主体的・能動的に担うことが出来る経済主体であり、またそのようであればならない。従って、「企業者」は日常的な経営管理を司る「経営管理者」とか、一般的意味での「資本家」とは必ずしも一致はしない。様々な危険や決断、創意、先見の明などの特徴で表現される、ある特殊な機能なのである。「指導すること」によって、「指導者活動」に基づいて、「慣行の軌道」を乗り越えうるのであればならない。慣行の軌道を変更し、循環軌道を変えうるためには、単に「潮流にしたがって泳ぐ」だけでは不可である。それに「逆らって泳ぐ」ことができねばならぬ、と。シュンペーターは、『経済発展の理論』第2章の冒頭で、ヴェーバーその人の名——注で——を掲げているので、そこから、『社会学および経済学の「価値自由」の意味』（ヴェーバー）にある、次の一節を想起させる。即ち、「いやしくも、職業的「思想家」に特に推奨されるべき何らかの義務があるとすれば、まさしくその時々の支配的な理想に対して、たとえ最も崇高な理想に対してさえも、必要な場合には「時流に抗して泳ぐ」ことができる個人的な能力を持つという意味で、冷静な頭脳を保持し続けることがその義務である」⁽³⁵⁾ というヴェーバーの「精神」である。だが、それと同時に、ニーチェ『人間的、あまりに人間的 Ⅰ』第5章「高級文化と低級文化の徴候」にあるアフォリズム〔第261節・精神の暴君たち〕⁽³⁶⁾ も、シュンペーターの「企業者」類型を理解する際に、無視しえない要素と思われる。いやむしろ、ヴェーバーその人自身が、このニーチェの著書を密かに精

読している事情をも考慮すると、一概に後者の可能性を捨てざることは出来がたい。

Ⅱ. に関しては、ヴェーバーからの影響を認めて、その「支配の社会学」や『政治論集』における「政治指導者」の概念を重視すべきであろう。ヴェーバーの代表的な書である、『支配の諸類型』（カリスマの支配）に叙述されたカリスマの資質、「指導者（フューラー）」概念からの由来や共通性である。それだけでなく、シュンペーターが、ヴェーバー的「合理化」過程の進展などで「企業者」精神が次第に失われて、企業者機能の無用化と、強いては資本主義文明の解体とそれに伴う社会主義への道、を構想する時、そうした着想に刺激を与えたのは、ヴェーバーのいう「カリスマの日常化」であったといえるかもしれない（『資本主義・社会主義・民主主義』第2部）。

Ⅲ. に関して。前節との関連でいえば、経済と「日常生活」は一体となりやすく、経済は「慣行」化して、一旦慣行化した経済から脱出するのは容易ではない、という趣旨であった。それ打ち破るのが「指導者活動・資質」であり、ここで問われているのが、「経済主体の態度」（第2の点）である。慣行軌道を執拗に支える古い意識、「思考習慣」が新しいことを行おうとする際の障害物となる。それを乗り越えられるのは、シュンペーターによれば、「意志」（Wille）であり、「精神的自由」（geistige Freiheit）であり、「力の余剰」（Überschuß der Kraft）において、他に寄るべきものはない。初版・第7章「国民経済の全体像」——前述の通り、第2版以降では省略された——では、大企業創出に当たって重要なのは、欲望拡大とか需要が問題なのでなく、あくまでも「巨大な指導者の人格」⁽³⁷⁾ なのだとして強調している。これだけを見ると、ヴェーバーに比重を置きたくなるが、わたくしは、シュンペーターの貴族的精

神性、ニーチェの著書『人間的、あまりに人間的』の副題であると共に、ニーチェその人の根本精神であった「自由精神」の意味（同書「序文」参照）、そして、一例として、「力の過剰」や「精神の自由」について触れた、ニーチェ『力への意志』の次のアフォリズム（第899、963節）に着目するが故に、ニーチェ思想との関連を重視する者である（「現代の心理学者、彼らは知らずしらずデカダンスの症候にのみ眼をとどめ、たえず私たちをして精神に不信をいだかしめる。…ところが現今あらわれつつあるのは、新しい野蛮人 {キニク派・誘惑者・征服者} 精神的卓越性と健康や力の過剰 (Überschuß von Kräften) との合体。」(第899節)⁽³⁸⁾、「偉大な人間は必然的に懐疑家である (略)。ただこのことは、何か偉大なことを、またそのための手段を意欲することこそ、人間を偉大ならしめるということを前提する。あらゆる種類の確信からの自由はそうした人間の意志 (Wille) の強さに属する。だからこれは、あらゆる大いなる激情が実行するあの「啓蒙専制政治」にふさわしい。そうした大いなる激情は知性を奉仕させる。それは、神聖ならざる手段をも行使する気力もち、断乎とした態度をとり、おしみなく確信するが、その確信自身を利用するのであって、それに屈服するということはない。信仰への欲求、肯定にせよ否定にせよなんらかの絶対的なものへの欲求は、弱さの証明である。すべての弱さは意志の弱さである。信仰の人間、信徒は、必然的に卑小な人間種である。このことから帰結するのは、「精神の自由」(Freiheit des Geistes)、言いかえれば、本能としての無信仰が、偉大さの前提条件であるということである。」(第963節)⁽³⁹⁾。

IV. は、ヴェーバー『倫理』論文末尾の「享楽人間」やニーチェ『ツァラトゥストラ』の「享楽」(Genuß) を挙げておこう⁽⁴⁰⁾。

最後のV. の一節では、ヴェーバーの『倫理』論文や『職業としての政治』における、「スポーツ」とか「(内的な) 喜び」(Freude) という表現がシュンペーターに大きく影響していることは確かである。しかしながら、シュンペーターの本書・第2章の末尾を飾る「さまざまな刺激」と題されたまとめの冒頭に、「権力意志」(=力への意志) なる重要語を配していること⁽⁴¹⁾、「ますます多くを」というモットーを成立させる企業者類型の動機として、「勝利者意志」(Siegerwille)⁽⁴²⁾ とか、様々な「喜び」(創造の喜び、行為そのものに対する喜び、仕事〔Werk〕に対する喜び) とか、「力の余剰」といったニーチェ的な言い回しやその精神がこの文脈に埋め込まれていることなどから⁽⁴³⁾、ヴェーバー以上に、ニーチェの思想的立場を考慮しつつ、この節を理解することが求められているように思われる。その手掛かり、一例として、ヴェーバー『職業としての政治』(「内的な喜び」としての権力感情) とも関連する、次のニーチェの一節を紹介しておこう(「自己に対するよろこび。——「事柄に対するよろこび」と人はいう、しかし本当はそれは事柄に介しての自己に対するよろこびである。』『人間的、あまりに人間的』第501節)。これ以前にシュンペーターは、『理論経済学の本質と主要内容』(1908年)「第4部・第5章」で、断片的ながら、ニーチェの著者と見做されたもの(『力への意志』)に言及していること⁽⁴⁴⁾ から、1908年から1912年(『経済発展の理論』初版)、次いで1926年(同2版)と、この長い間にかけて、シュンペーターとニーチェとの断続的な歴史には、相当深い因縁が横たわっているように推察されるのである。

おわりに

本稿は、独立したシュンペーター研究ではない。さりとて、ニーチェ研究でもヴェーバー研

究でもない。むしろ、「ヴェーバー・ニーチェ」問題の考察からはみ出て、「意図せざる結果」として産まれた副産物とでも形容する他ない。「軌道」というしばしシュンペーターが用いる比喩を借用すれば、こうだろうか。ライン川に沿って同一方向に二つの列車が疾走していると。そこで、たまたま「ヴェーバー・ニーチェ」研究の列車が、別の軌道に転轍を試みるべく、「ドイツ歴史学派」⁽⁴⁵⁾と「近代経済学」の双方に熟知したシュンペーターという「本線」に乗り入れて、暫しこの軌道を走ってみると、車窓から眼に映ずる光景(=「企業者」概念)や耳に響く音の中に、従来の研究史とは異質なものがあるのではないか。そうした「研究者の目的や問題意識」、違和感に端を発している。本稿で試みたように、ニーチェという1890年代からヨーロッパを襲い始めた巨大な旋風は、1894年頃から始まるヴェーバーへの影響に対してだけでなく、純粋経済学者として出立したシュンペーターをも巻き込む程に、強烈な嵐であり、その爪痕の跡を、若きシュンペーターを代表する諸著作、とりわけ『経済発展の理論』(初版・第2版)の中に追い求める作業が、ここで与えられた使命であった。その中でも『発展』の第2章は、この著書の中心的「心棒」であり、また、数奇な歴史と運命を経たシュンペーター苦渋の理論内容である。この章の「各命題はすべて重要」だと強調していた「序文」が、ここで改めて想起される。本章の中に、セグメント的接着剤として、様々なニーチェの思想や断想が有機的に組み込まれていたことは、未だ公認されたわけではないが、意想外であった。哲学者・三木清はこの著書を一読した後で、「始めて人間の出てくる経済学に出会った」と語ったという有名なエピソードが伝えられているが、人間の「出てこない」経済学が主流をなす中で、恐らく、「ニーチェと現代思想」を書いた三木が走

らせた眼の先には、何にもましてこの第2章を中心とした叙述内容が横たわっていたと、私には想像されるのだ⁽⁴⁶⁾。ヴェーバーやニーチェ色の入り交じった改筆後の第2章がなければ、本書は単なるワルラス的「純粋経済学」に終始してしまい、シュンペーターをして「総合的社会科学」に導いてゆく「中間点」とはならなかったであろう。また、前でも触れたように、この『発展』の核には「発展の人間学」が存在すると中山伊知郎は「全集」の中でこう特徴づけて、重要な問題提起をしているが、無名の大衆と結びついて資本主義的革新を遂行する「企業者」というビジョンには、本稿で解明を試みた「哲学的」人間学で補強されていたこと、こうした事実をその先学のいう「人間学」の片隅に据えたく思う⁽⁴⁷⁾。

注

- (1) Max Weber, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, in: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. I, 1920, S. 204. (大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、1989年、366頁; 梶山力訳・安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』未来社、1994年、357頁)。
- (2) M. Weber, Wissenschaft als Beruf, in: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 3. Aufl., 1968, S. 598. (尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波書店、1980年、42頁。但し、原文の vernichtend は、「否定的〔批判〕」という意味ではない)。
- (3) M. Weber, Politik als Beruf, in: Gesammelte Politische Schriften, 1971, S. 533. (脇圭平訳『職業としての政治』岩波書店、1980年、56頁。「〔内的な〕喜び」(訳、76

- 頁)とシュンペーターについては、本文後半の叙述を参照)。
- (4) Ibid., S. 508. (前掲訳、13頁)。Friedrich Nietzsche, Also sprach Zarathustra, de Gruyter, 1988, S. 408. (吉沢伝三郎訳『ツァラトゥストラ 下』ちくま学芸文庫、1993年、351頁)。ヴェーバーとニーチェとのこの点については、John Patrick Diggins, Max Weber. Politics and the Spirit of Tragedy, 1996, p. 256. でも指摘されている。
- (5) 齋田宗人・ハンス・ブロッカルト訳『ニーチェ、ヨーロッパのニヒリズム』創文社、1999年、30頁。ニーチェのいう「超人」の根本思想はこうである。「人間は、超克されるべきところの、何ものかである」(『ツァラトゥストラ』「序説」3.)。「人智学」の項目について説明した上山安敏は、内田芳明の理解とは異なり、ニーチェがダーウィン進化論に反対していたと指摘している。『ニーチェ事典』弘文堂、1995年、294頁。また、ニーチェ「力への意志」の「力」について、ハイデッガー『1. ニーチェの形而上学 2. 哲学入門—思索と詩作』(秋富克哉・神尾和寿・ハンス＝ミヒャエル・シュバイヤー訳)創文社、2000年、166頁で、訳者たちは、これに対し「自分自身を絶えず乗り越えようとする力の動性そのもの」と適切な哲学的注釈を行なっている。
- (6) 「訳者あとがき」、村岡晋一・瀬嶋貞徳・平田裕之訳『ヘーゲルからハイデッガーへ』、作品社、2001年、327-328頁。
- (7) 吉田昇三『ヴェーバーとシュンペーター—歴史家の眼・理論家の眼』筑摩書房、1974年、65-67頁。
- (8) 伊東光晴・根井雅弘『シュンペーター—孤高の経済学者—』岩波新書、1993年、44頁。
- (9) 前掲書、101頁。
- (10) Joseph A. Schumpeter, Capitalism, Socialism and Democracy, 1942. (中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』(第3版訳)、上、中、下、1962年。同訳名で「新装版」1995年刊がある)。
- (11) J. A. Schumpeter, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. Eine Untersuchung über Unternehmervergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus, 2. Aufl., 1926. (塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論—企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究—』(第2版訳)上・下、岩波文庫、1977年—中山・東畑による初訳は1937年である)。本文中でも言及しているように、シュンペーターの原書(初版)は、1912年に出版されたものである。その第2版を出さざるを得なかった事情については、「第2版序文」で説明がなされている。第2版以降で削除された、「初版」第7章の「国民経済の全体像」は、次の訳書に収録されている。佐瀬昌盛訳・玉野井芳郎監訳『社会科学の過去と未来』ダイヤモンド社、1972年、313-405頁。『経済発展の理論』の初版と同第2版を比較分析した佐瀬による「解説」は、本稿で意図した目的を進める上で、大いに役立つ。
- (12) 塩野谷『シュンペーター的思考 総合的社会科学の構想』東洋経済新報社、1995年、292-311頁(以下『思考』と略記)。
- (13) Schumpeter (1942), p. 61. (『資本主義・社会主義・民主主義』、上、114頁)。
- (14) Ibid., pp. 83-84. (前訳書、150-151頁)。
- (15) 『思考』、209頁。
- (16) 前掲書、393頁。ここには、五つの論文が紹介されているが、中でも最も有益だったの

は、ニーチェ哲学との共通要素を論じた、Enrico Santarelli and Enzo Pesciarelli, *The emergence of the development of Schumpeter's theory of entrepreneurship, History of Political Economy*, 22. 4, 1990, pp. 677-696. である。歴史的変動に関するシュンペーターのヴィジョン形成に影響を与えたものとして、ニーチェ以外に、ベルグソン、ソレル、タルド、マッハなどが、また、ニーチェが進化主義に批判的であったことなどが、ここで簡単に紹介されている。シュンペーター（東畑精一訳）『経済分析の歴史』5、岩波書店、1958年、1624頁、大野忠男『シュムペーター体系研究』創文社、1971年、384-385頁、根岸雅弘『経済学の歴史』筑摩書房、222-223頁、同『シュンペーター——企業者精神・新結合・創造的破壊とは何か』講談社、2001年、58-59頁も参照。本稿は、上記イタリア人による論考とは別の経路、「淵源」から出立しているし、後述の森嶋や根井による指摘に自足しているわけではない。只、シュンペーターが晩年、うつ状態に陥って、しきりとアフォリズム (aphorism) を書き始めたという R. Swedberg の著書を、根井が紹介 (2001年、170-171頁) している点は、アフォリズムの先駆者のひとり、ニーチェとの「再」関連を窺わせて、興味なしとしない。Richard Swedberg, Joseph A. Schumpeter. *His Life and Work*, 1991, pp.199-206.

- (17) Zarathustra, S. 26. (前掲訳『ツァラトゥストラ』、上、41-42頁)。
- (18) Schumpeter (1942), pp. 127-128. (『資本主義・社会主義・民主主義』、上、231-232頁)。
- (19) 森嶋通夫『思想としての近代経済学』岩波新書、1994年、60-61頁。シュンペーターと

パレートとの関係については、同書169頁以下、参照。「例えばプロテスタンティズムの禁欲の精神が資本主義を興隆させるというウェーバー説が正しいのも、セイ〔「供給は需要をつくる」：J. B. Say (1767-1832)〕法則時代だけであって、反セイ法則時代〔-森嶋は、「第1次大戦以後の世界」を念頭に置いている〕には、ケインズが主張したように、節約や禁欲は、経済に悪影響を与えるという意味で悪徳であり、これに関するヴェーバーの「命題」は単なる過去についての命題にすぎない、という (153頁)。しかし、バクスター (R. Baxter : 1615-1691) やウェズレー (J. Wesley : 1703-1791) の時代に、既に宗教的な禁欲の思想は崩れていた。その思想は啓蒙主義 (18世紀末~19世紀初頭) に受け継がれたり、功利主義 (ベンサム、J.S.ミル) へと「解体」されていったのである。『倫理』論文発表時 (1904年) に、ヴェーバーが「節約」や「禁欲」の「上部構造」が機能していると考えていたかのごとく解釈している、森嶋説には同意し難い。反セイ法則時代に属する20世紀初頭に、ヴェーバーは、ニーチェが強調していた、大量消費と結びついた「享楽人」の出現を危惧していたのである。なお、明治から今日 (1990年半ば) までのわが国におけるシュンペーター研究史については、金指基による「第6章 シュンペーター体系の学史的展開過程」(『シュンペーター再考』現代書館、1996年、所収) と題された論文が、当該領域における有益な史的バードビューを与えてくれた。

- (20) *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, 1908. (大野忠男・木村健康・安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』、上・下、岩波文庫、1983/84年)。

- (21) Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. Duncker & Humblot, 1912.
- (22) 『思考』、223頁。
- (23) Schumpeter (1926), X I. (前掲訳『経済発展の理論』、上、15頁)。
- (24) Ibid., X I. (前訳書、14頁)。
- (25) Ibid., X I. (前訳書、15頁)。
- (26) Ibid., X II. (前訳書、16-17頁)。
- (27) 第6章も、表題が「経済恐慌の本質」であったものが「景気の回転」に改められ、内容も改められた。ところで、前の注で紹介しているように、『経済発展の理論』(初版)第7章「国民経済の全体像」の訳者である佐瀬は、初版・第2章と第2版・第2章の目次をそれぞれ比較した貴重な成果を残してくれている。ここに引用しておく。

「〈初版〉

第2章 経済発展の根本現象

予備的事項——歴史的現象としての静止的経済——その原因——人間行動の2つの類型——経済領域における非享乐的行動およびその指標——その心理学的説明、経済にとってのその意義——異論にたいする反駁および補足——発展の外的形態——将来価値の体系——企業者の概念と機能——新結合の遂行のさまざまな方法——企業者の購買力・銀行家
(第2版)

第2章 経済発展の根本現象

- (1)社会的発展の概念について——経済発展——本書にいわれるところの「経済発展」の意義——われわれの問題——予備的事項
- (2)新結合の遂行としての経済発展——5つの事例——国民的生産力の転用——財貨剥奪と財貨さし向けの手段としての信用——「発展」はどのように金融されるか——銀行家の機能
- (3)根本現象——企業、企業家——「新結合の

遂行」はなぜ特殊な種類の機能であるか——指導者性と慣行の軌道——共同経済における指導者と私的経済における指導者——動機の問題とその意味——刺激」

訳者は更に、シュンペーターが「初版」の企業者人格の描写について様々な批判を浴びたために、その「企業者像」はかなり修正された、とも述べている(前掲『社会科学の過去と未来』、414-417頁)。

前述したようにシュンペーターは、今後問題にするなら「初版」より第2版の内容の方に眼を向けて欲しいと述べていることから、「初版」・第2章をわざわざここで取り上げるのは、シュンペーターの意図に反するようで気が引けるが、既に、1912年に刊行された「初版」のこの章の中に、従来のがわ国におけるシュンペーター研究では着目されなかったニーチェのシュプールが濃厚に刻印されているので、以下、その箇所を簡単に列記しておく。両者の「内容」に係わる「異同」研究は、将来に残された課題である。

Zweites Kapitel. Das Grundphänomen der wirtschaftlichen Entwicklung. S. 103-198. (原書「初版」第2章 経済発展の根本現象)。

- S. 121. [121頁-Sは頁の意] : 訳書210頁にあるように、初版のこの頁には、ヴェーバーや、ニーチェ(『人間的、あまりに人間的』I、第5章「高級文化と低級文化の徴候」第261節)と関連する、経済主体が示す「抵抗の2類型」、すなわち「流れにしたがって泳ぐ」と「流れに逆って泳ぐ」が見える。
- S. 125. : ここに、シュンペーターがしばしば多用する、創造的新ゲシュタルト(schöpferisches Neugestalten)がある。その解釈には、『力への意志』(260節)の「創造的力 [Kraft]」などが役立つ。創造

的ゲシュタルトは、「われらが行為の人」(Unser Mann der Tat=企業者)と不可分な関連にある。

- S. 141. : 財貨獲得と欲求満足、快楽的消費などへの喜び (Freude) が通常の人間に見られる動機 (快楽感 : Lustgefühl) であるのに対し、シュンペーターの「企業家」類型の典型的動機は、創造そのものに対する喜び (Freude am schöpferischen Gestalten)、仕事 (Werk) に対する喜び、などに基づく動機であるが、快楽とは無縁な (ahedonisch) 行為と動機が、この頁の前後で論じられている。『人間的、あまりに人間的』(501節)、『ツァラトゥストラ』(第3部、しるし)や『職業としての政治』(脇訳、76頁)、参照。
- S. 145-146. : 創造の喜び、という前の文脈に続いて、ここでも、それと関連する「行為そのものの喜び」(=心理的現実)が説明されているが、もっと劇的な事は、『力への意志』(第863節以下)の「強者と弱者」(Die Starken und die Schwachen)の分析に従うかのように、「弱者」と「強者」との対比、強者における「力の過剰」(Kraftüberschuß)の存在、そして、われわれの行為の人には限界効用の水準などまったく存在しない、といった、『限界効用の法則』に従って生活するクエイカー教徒(『倫理』大塚訳、344頁)的ハウムの理想に対立する騎士的、貴族主義的行為を、敢えてシュンペーターが高く評価するかのよう、ニーチェ的概念や反限界効用的な表現がここに書かれている、という事実である。しかし、14年後の同書第2版では、「強者」や「弱者」など、安易にニーチェを想起させるような文言は削除されている。とはいえ「力の過剰」は、残されてしまっ

た。

- S. 162. : ここには、「大多数の人々の状態」、その人々の「習慣的態度」(新たなもので実験を試みようとしなない態度、道徳的勇氣に欠ける態度)や事柄(ザッへ)をじっくり考える「力と余暇」(Kraft und Muße)を持ち合わせぬこと、などが触れられているが、これらには、『力への意志』(953節:「2つの道」(過剰な力、閑暇、新しい貴族主義))や『人間的、あまりに人間的』(501節:「自己に対する喜び」)が論述の下地になっていると思われる。
- (28) 前掲訳(『理論経済学の本質と主要内容』、上、27頁)。
- (29) 前掲訳、171頁。
- (30) Schumpeter (1926), S. 117-118. (前掲訳『経済発展の理論』、上、210-211頁)。
- (31) Ibid., S. 125-126. (前訳書、225-226頁)。
- (32) Ibid., S. 128-129. (前訳書、229-230頁)。
- (33) Ibid., S. 134, 137. (前訳書、240, 244頁)。
- (34) Ibid., S. 137-140. (前訳書、245-247頁)。
- (35) Max Weber, Der Sinn der Wertfreiheit der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften, in: G. A. z. WL., 3. Aufl., 1968, S. 540. (松代和郎訳『社会学および経済学の「価値自由」の意味』創文社、1976年、105頁)。
- (36) F. Nietzsche, Menschliches, Allzumenschliches, I und II, de Gruyter, 1988, S. 218. (池尾健一訳『人間的、あまりに人間的』、I, ちくま学芸文庫、1994年、281頁)。
- (37) 前掲訳(『社会科学の過去と未来』)、336頁。
- (38) F. Nietzsche, Der Wille zur Macht, Kröner, 1980, S.609. (原 佑訳『権力への意志』、下、ちくま学芸文庫、1993年、414頁)。
- (39) Ibid., S. 642. (前訳書、463頁)。
- (40) Weber (1920), S. 204. (前掲大塚訳、366

- 頁。前掲梶山訳・安藤監訳、357頁) ; Nietzsche (1988), S. 250. (前掲吉沢訳、105頁)。
- (41) Schumpeter (1926), S. 138. (前掲塩野谷・中山・東畑訳、上、245頁)。
- (42) Ibid., S. 138. (前掲訳、246頁)。
- (43) Ibid., S. 138-139. (前掲訳、246-247頁)。
- Joseph A. Schumpeter. *The Economics and Sociology of Capitalism*, edited by Richard Swedberg, 1991, p.40. だが、ストックホルム大学(当時)で社会学を担当するこの編者も、ニーチェへの目配りが無いようである。シュンペーターは、1928年の「企業家」と題した論文でも、「リーダーの役割を土台としたモチベーションは、「行動意欲」、つまり支配の意志、勝利への意志の周辺で行われる。これに対して、被リーダーのモチベーションはおおむね快楽性とか「義務を果たす」といった概念の助けを借りるような方法となっている」と、一見するとヴェーバー的な、だが、より立ち入るとニーチェ的な「企業家の機能」が語られている。清成忠男編訳『企業家とは何か』東洋経済新報社、1998年、27頁。従って、編訳者による「解説」に、ヴェーバー以外に、人文科学・哲学に属するニーチェの思想を入れて初めて、これで画竜点睛となろう。濱崎正規『シュンペーター体系の研究』ミネルヴェ書房、1996年、359頁、参照。
- (44) 前掲大野・木村・安井訳、下、485頁。
- (45) ドイツ歴史学派との関係については、塩野谷祐一「シュンペーターと歴史学派」住谷一彦・八木紀一郎編『歴史学派の世界』日本経済評論社、1998年、120-143頁、参照。
- (46) 三木清「ニーチェと現代思想」『三木清全集』第10巻、岩波書店、1967年、352-372頁、参照。東畑精一の妹を妻に迎えた三木のこの論文は、『三木清エッセンス』(内田弘編・解説)、こぶし書房、2000年にも収められている。近年、丸山眞男とニーチェとの関連が次第に注目されつつあるが、ニーチェ『力への意志』の副題にある「価値の転換」(Umwertung)が、丸山25、6歳の折、『国家学会雑誌』(1940年)に掲載された助手論文中に僅かながら顔を出している。「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」(第3節 徂徠学の特質)『丸山眞男集』第1巻、岩波書店、1996年、204頁。同じく、敗戦直後に発表された福沢論(「福沢に於ける「実学」の転回」「福沢論吉の哲学」——いずれも1947年)でも丸山は、「自由なる精神」(ニーチェ『人間的、あまりに人間的』の副題)や「遠近法的認識」というニーチェの片言隻句を挿入している。丸山眞男『福沢論吉の哲学・他六篇』(松沢弘陽編)、岩波文庫、2001年、59、80頁、参照。ヴェーバーや福沢の諸作品と触れる以前の旧制高校時代に、既にニーチェとの接触があったことを見逃してはならないであろう。
- (47) 「I シュンペーター『経済発展の理論』解説」『中山伊知郎全集』補巻、講談社、1981年、26-33頁。また、次の文献も参照、「シュンペーターの経済学」『中山伊知郎全集』第1集、講談社、1972年、307-385頁。

(ひぐち たつお、本学科教授)